

SONRISA

そんりさ

Vol.143



有罪判決を受けた
現在のリオス・モ
ント=上=と、
1980年代、軍服を
着た独裁者時代の
リオス・モント

「そんりさ」「微笑み」を意味します。レコムは様々な活動を通じて、ラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

グアテマラ・ジェノサイド裁判

- | | | |
|----|----------------------------|------------|
| 02 | グアテマラ・ジェノサイド裁判 | …… 新川志保子 |
| 10 | DSTワークショップ ニカラグア・グアテマラ | ……池田佳代 |
| 13 | はじめての中米 | …… 林綾美 |
| 15 | 「バリオの子とラ米児童書翻訳」 CLIJAL活動から | ……宇野和美 |
| 17 | ラ米百景 「モンテビデオにて」 | …… 伊高浩昭 |
| 18 | 食巡り「豚肉とナスとキノコの炒め煮」 | …ミゲル・アクーニャ |
| 19 | ニュースクリップ | ……サザエ |

2013年6月1日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

グアテマラ ジェノサイド裁判に有罪判決 だが一転無効に

新川 志保子

そんりさ前号で紹介したように、グアテマラでのジェノサイド裁判が3月19日から始まり、その判決が5月10日におきた。被告のエフライン・リオス・モント元将軍にジェノサイドの罪で禁固50年、そして人道に反する罪で禁固30年、計80年という有罪判決であった。

この裁判は、キチエ県イシル地域で、1982年3月から83年8月までの期間（リオス・モントが軍事独裁者であった時期）に、15の虐殺事件を命令した責任が問われたもの。これらの虐殺により1771人が殺害され、29000人が避難民となった。罪状には、この時期軍による拷問や女性への性暴力の責任も含まれる。裁判はハイリスク裁判所A法廷で行われた。被告はもう1人、リオス・モント時代の軍諜報部トップであったマウリシオ・ロドリゲスもいたが、こちらは虐殺を命令したことが立証できないとして無罪となった。

被告側は、ジェノサイドはなかった、そして、両被告は虐殺を命令しなかった、と主張していた。この裁判の焦点はイシル地域での虐殺がジェノサイドであったのか、そして軍の最高位にいたリオス・モントに命令責任があったのかということであった。裁判では虐殺のサバイバーらと各分野の専門家あわせて約140人が証言した。

後述するように、被告側によって裁判を中止、あるいは無効にするための多くの抗告が提出され、裁判が一時停止することもあったが、結局続行が決定され、5月10日の判決までたどりついたものだ。だが、判決の10日後の5月20日、被告側が出した抗告の一つが認められ、憲法裁判所はこの判決を無効とし、裁判を4月19日に戻ってやり直すよう命じた。以下に裁判の内容と判決、そしてその後の経緯を紹介したい。

被害者証言

虐殺を生き延びた人たちが、どのようにグアテマラ軍が人びとを殺害したかを語り、その中には女性や子ども、老人も多く含まれていた。また、生き残った人びとは軍の厳しいコントロール下に置かれ、男性は自警団に組み込まれたこと、山中に逃げた人びとの極限の経験などを証言した。

ある証人は、母親は岩で頭を殴り殺され、幼ない弟は絞め殺されたあと身体を切り刻まれたこと、父親と祖父も殺されたことと証言した。別の証人は夫が軍に捕まって殺され、他に村人28人が同様に殺され、その後埋められたことを証言した。他の証人も、軍によってどのように村が破壊され、家が焼かれ、収穫や家畜が盗まれたり焼かれたりしたことなどを語った。軍の焦土作戦は彼らの習慣や行事、伝統など祖先から伝わってきた彼らの文化を消滅させた、と語った証人もいた。ある村では兵士が60あまりの家屋に火をつけ、中にいた人たちを焼き殺したという証言、軍が人びとを教会に集めて殺した、という証言などが続いた。多くの証人が「人間ではないかのように扱われた」と語った。チュエルという村に住んでいたある男性は、自分の家族を含め96人の人びとが軍に殺されたと語った。人びとは教会に集められ、そこから橋に連れてゆかれ兵士たちにマチェーテで殺された。死体は川に投げ捨てられ、「血の川」になったという。

虐殺を生き延びて山中に逃げ込んだ人びとは、軍の爆撃におびえながら飢えを耐えなければならなかった。ある女性は山中で何もなければならなかったこと、そして生まれた息子はヘリコプターによる爆撃の「恐怖のために」2歳で死んだことを証言した。

質問された人はすべて、国家による「裁き」を要求し、自分たちに起こったことが子どもに起こらな

いように望むと答えた。多くの証人が自分の語っていることは真実であり、信じてもらいたいと述べた。

性暴力

被害者のうち10人の女性が性暴力の被害者であることを証言した。裁判長は証言の内容が強かんなどであるために、プレスに対して証人の写真を撮影しないように言い渡した。証言した女性たちは、自分の身に起こったことだけでなく、周囲の他の女性や女の子も強かんされたことも証言した。

ある女性は1982年5月、12歳の時に母親と共にツアルバルの軍駐屯地に連行された。両手両足を縛られ口を塞がれて、母親が兵士に強かんされるのを見せられたあと自分も強かんされた。その後ひどく出血し、母親はそこでの残虐な扱いのため死んだという。別の女性は、1983年に自分の村が焼かれ、その時3人の兵士に12歳の娘とともに強かんされた。その時彼女は妊娠6ヶ月だったが、強かんにより流産した。また、夫がゲリラだと疑われ「行方不明」にされたうえ、彼女自身もシナイ軍基地に連れてゆかれ、10日間穴蔵に閉じ込められ、3人の兵士に拷問・強かんを受けた。コツアルに住んでいた女性は、16歳の時に他の女性たちと共にとらえられ教会に連れて行かれてそこで目隠しをされて兵士らに強かんされた。幼い娘を連れて逃れた山中から下りて来たところをとらえられた女性は、娘を殺され、拷問・強かんを受けたうえに駐屯地に連れてゆかれ兵士のために料理させられた。

専門家証言

秘密墓地発掘を行ったグアテマラ法医学基金の法医学者ら、イシル地域を含むグアテマラ農村部をフィールド調査した文化人類学者、歴史家、ジェンダー、心理学者、軍事アナリスト、統計学者、弁護士など多岐にわたる分野の専門家が証言した。

グアテマラ法医学基金(FAFG)からはイシル地域での秘密墓地発掘に参加した複数のメンバーが証言し

ジェノサイドの定義

国連ジェノサイド条約 (Genocide Convention)
(正式名称「集団殺害罪の防止および処罰に関する条約」 Convention on the prevention and Punishment of the Crime of Genocide) 第2条より

集団殺害とは、国民的、人種的、民族的又は宗教的集団を全部又は一部破壊する意図をもつて行われた次の行為のいずれをも意味する。

- (a) 集団構成員を殺すこと。
- (b) 集団構成員に対して重大な肉体的又は精神的な危害を加えること。
- (c) 全部又は一部に肉体の破壊をもたらすために意図された生活条件を集団に対して故意に課すること。
- (d) 集団内における出生を防止することを意図する措置を課すること。
- (e) 集団の児童を他の集団に強制的に移すこと。

た。秘密墓地は個人のものもあれば集団もある。発掘された遺体のほとんどには頭部や胸部に銃弾の痕があり、銃撃を受けてから埋められたことがわかる。また、肋骨の骨折や頭部や顎、首などの傷もあった。同基金代表のフレディ・ペセリによると、これまでFAFGは1992年から2009年までの期間に1116件の秘密墓地発掘を行い、5800体以上の遺骨を発掘した。これらのうち、420体が裁判で争われていた時期にイシル地域で死んだ人びとのものである。その中で最も多かったのが26歳から49歳までだが、全体の33%、140人は18歳以下だった。そして98%が政府軍によって殺され、1.14%がゲリラによるものだったと結論している。遺体に損傷のあったもののうちのほとんどは銃痕があった。そして、同基金が2008年にまとめた調査では、発掘した遺体のうち83%の死因が致命的な傷害によるものであった。戦闘中にこれほどの高率で傷害によって死ぬことはあり得ず(戦闘中の傷害による死因は20%)、これらは「処刑的な殺害方法」と考えるほかはない、と結論した。

1993年から96年まで和平交渉の政府側代表を務め、大統領付き平和局長官でもあったエクトル・ロ

サーダは、内戦の歴史とイシルの人びとに対する反乱鎮圧作戦とジェノサイドについて証言し、そこで「イシル地域では、1981年から83年にかけて国家は軍を使って体系的にジェノサイドを行った」と結論した。実際の戦闘にかり出された兵士から下士官レベル、そして司令官まで軍のすべてが加害者であると。国家の目標はゲリラの活動地域に住む住民を統制することで、そのために大量虐殺を繰り返して、村を焼き払い、収穫を破壊し、逃げる人びとを迫害した。そしてこれはイシルの人びとを「敵」とみなすことで正当化され、国を救うためには殲滅しなければならない存在とされた。ロサーダはさらに、当時の米国による安全保障ドクトリンがグアテマラ軍に与えた影響と、「内部の敵」という概念が支配層によるマヤ先住民族に対する差別意識と重なったということについても述べた。イシルの人びとは伝統的によく組織され、頑固で、プランテーション労働を拒否するような「まつろわぬ民」と思われていたからだ。支配層は軍にイシルの人びとを監視するよう要請し、それもイシル人は反乱者という刻印を押されることにつながった。また、後年公開された1982年2月のCIA機密文書にも、グアテマラ軍がイシルの人びと全体をゲリラ支持者であると見なしていると明記されている。貧民ゲリラ軍EGPというゲリラが当時イシル地域一帯で活動していたが、近くに住んでいたというだけでジェノサイドのような殺戮を繰り返したことは到底正当化できないと証言した。検察による「ジェノサイドという国家戦略はあったのか」という問いに対しては「何よりも事実が語っている」と答え、文書で表現されていなくてもジェノサイドを行うという意図はあった、としている。

グアテマラの国内避難民の調査を行い、国連真相究明委員会に協力して千人以上の証言を分析したエリザベス・オーグスビーは、軍の反乱鎮圧作戦は「内部の敵の殲滅」を目的としており、「殲滅 aniquilacion」という言葉は軍の「ビクトリア82」作戦にも出てくると証言した。そして、軍はイシル地域の住民はゲリラの支援基盤だと見ていたので、彼

グアテマラ内戦

1954年、農地改革などを行おうとした当時のハコボ・アルベンス政権を国際共産主義の手先とみなす米国政府とCIA（中央情報局）の支援を受け、アルマス大佐がクーデターを起こし政権を握った。これに対し、60年には改革派の若手将校が中心となって反政府ゲリラが組織され内戦が始まった。この内戦は1996年に和平協定をもって終結するまで36年間におよんだ。ゲリラとは別に、農村部で土地改革や生活改善を求めて、先住民族が中心の組織づくりも進んだ。しかしこうした人々もゲリラの仲間と見なされ、70年代末から80年代にかけての政府軍による弾圧・虐殺の対象となった。78年のパンソスにおける農民虐殺、80年の農民組織CUCのメンバーによるスペイン大使館占拠に対する焼き討ちなどを経て、81年から82年にかけて弾圧はピークに達する。ゲリラが活動する地域の住民を皆殺しして殲滅する「焦土作戦」が展開された。440もの村が焼き払われて地図上から消滅し、住民が虐殺された。この内戦で20万人以上の人々が殺されたり、「失踪」させられたりした。連れ合いを殺された女性、孤児も多く生まれた。弾圧を逃れて百万人以上が故郷の村を離れ、都市部や隣国、あるいは山中へ逃れた。



らも「内部の敵」となり殲滅の対象となった。そして同地域で無差別な虐殺、女性や女の子どもへの強かん、爆撃、家屋や収穫、家畜を焼き払うなどが行われた。また、イシル人はラディーノ（非先住民）に容易に服従しないことで反逆的とされ、その人びとに対する社会的文化的な攻撃、破壊も行われた。また「フィルメサ83」作戦では、軍はこれらの人びとを反乱分子・敵と見なしていた。そして武装した

グループと武器を持たない市民を区別しなかった。この戦略では、人びとの物理的、そして心理的なコントロールを目標としていた。人びとを殺戮し、収穫物を焼いて、食糧調達を阻んだ。飛行機とヘリコプターを破壊攻撃に使用することは軍上層部により計画され、人びとを迫害し、山中に追いやり、弱者を直撃した。また殺されなかった住民は軍の監視地域に居住することを強制された。山中に逃げ込んだ人びとは自らを組織し「抵抗の共同体」を作ったが、これは軍の標的となり恒常的な爆撃が行われた。「戦略モデル村」など軍の統制下におかれた人たちは、出入りはもちろんのこと、収穫量など厳しくコントロールされた。住民は自警団に入ること強制され、同じ民族に対し人権侵害や殺害を犯すこともあった。再教育プログラムという心理作戦は、軍に服従する「新しい先住民」を作り上げることが目標とされた。従わないものは殺された。

地図の専門家であるエドワルド・バスケスは、弾圧を逃れてイシル地域から脱出した住民は、平均で60～90キロの距離を逃げただろうと推定し、逃避行が山中であったことを考慮すると実際に人びとが移動した距離はその3倍ほどになるだろうと証言した。

文化人類学者ベアトリス・マンツはメキシコに逃れた避難民と国内避難民の状況について証言した。1981年にメキシコの難民キャンプにいたグアテマラ人は2000人だったのが82年には46000人に増えていたが、イシル地域の人びとはいなかった。それはイシルが地理的に離れていて、軍の監視が厳しかったためにメキシコまで到達できないからだった。マンツが入手したCIA資料によると、グアテマラ軍は住民がゲリラを支持していると決めつけ、「住民をゲリラと同様に扱ったので難しい状況だ」とあることも証言した。

ジェンダーと国際法を専門とする弁護士パロマ・ソリアは、女性への攻撃は体系的で、イシルの人びとに対する破壊戦略の一部であったことを証言した。女の子もや妊娠した女性、老女も強かんされた。女性への性暴力は継続して行われ、マヤ・イシ

ル民族を抹殺しようとする目的で物理的、文化的に地域の社会を破壊する一端ともなった。強かんも身体の切断など同様に恐怖のトラウマを植え付けるからだ。女性は戦争の標的ともなった。妊娠した女性がいれば、その腹から胎児を取り出し殺した。

「種は殺さなければならない」からだ。マヤ・イシル民族を抹殺しようとする意図を客観的に明確にしている。女性はコミュニティの価値を受け継ぎ伝える存在、生活の基本的な知識を与える存在だからだ。またジュネーブ条約や、国際刑事裁判所の解釈などを引用して国際法廷は戦時下での性犯罪を戦争犯罪の一つとしていることも証言した。

犯罪における心理を専門とする心理学者ニエベス・ゴメスは戦争と「精神の総合性が傷つけられた時」の個人とコミュニティへの心理的影響について証言した。ゴメスはイシルで100人に聞き取りをした。マヤ・イシルの人たちの毎日の暮らしの中で、自然と死者、精神的儀式、言語、動物の特別な場所、家族に文化を継承する存在としての女性、コミュニティの規律の維持と問題解決に貢献する長老の存在などに対する畏敬の念がとても強いことを指摘した。また内戦が彼らにどのような精神的トラウマを残しているかも証言した。虐殺は、男性と女性を別のグループに分けて行われた。虐殺は一回きりの出来事ではなく、ある時期に継続して起こったものであり、「極限の恐怖」と殺されてゆく人びとの無力さを心に植え付けた。山中に逃げ延びることができた人たちも、「恐怖の感情」の中で生きなければならなかった。男性が自警団に入ること強制されたのも、相互監視でお互いに不信感を持つという状況を生んだ。ゲリラと見なされるのではないかという恐れで、コミュニティの祭りや集まりを行わなくなった。火はマヤ・イシルの人びとにとって非常に重要なものだが、山中では軍に見つかるのを恐れて火を焚けなかった。このような伝統や習慣の断絶は民族のアイデンティティを再構成することになった。「死か適応か」という選択以外にはなかったからだ。このような経験は深い不安、喪失感や無力

感、苦悩、緊張といった形で個人の心理を傷つける。マヤ・イシルは家族レベルでもコミュニティのレベルでもバラバラになってしまった。

歴史家のアンヘル・バルデスは、マヤ・イシル文化が歴史的にどう見られてきたかについて述べた。そして、内戦中の軍の攻撃はとりわけこのマヤ・イシル文化を破壊したと証言した。すべての習慣が影響をうけたが、とりわけ人びとと自然、宇宙の相関関係に基づいた世界観（cosmovision）と土地の重要性が影響を受けた。マヤ・イシル文化は軍の標的であったと証言。文化への攻撃は突発的なものではなく計画されたもので、グアテマラで唯一の言語（スペイン語）と唯一の文化の国にしようという「スペイン語化」計画の一部であるとしている。そしてイシルの人びとにとって文化は「抵抗の道具」となった。

パトリック・ボールはイシル地域での殺害統計分析について証言した。グアテマラ軍は非先住民に比べて先住民を圧倒的に多く殺した。1982年4月から83年7月の間、イシル地域で軍に殺された非先住民は非先住民人口の0.7%であったのに比べて、先住民はその人口の5.5%に達している。ただ、分析したのは81年の国勢調査で、データが不完全なためにさらに多数の死者が出ているだろうとも推定している。また、調査時期を1979年から86年まで広げると、軍は先住民の18.3%を殺害（非先住民は3.2%）していると計算されるとしている。これはほぼルワンダにおけるジェノサイドに匹敵する割合となる。また、原告側の質問に答えて、現在の殺人率と当時を比較すると、非先住民は1982～3年は現在の10分の1が殺されているのに比べて、先住民は1982～3年には現在の100倍の人数が殺されていることになる、と述べた。

軍事アナリストで自身もペルー軍の退役将軍であるロドルフォ・ロブレスは、軍の指揮系統（cadena



傍聴人で埋まった法廷（5月10日判決の日）

de mando) について証言した。リオス・モント下のグアテマラ軍は他のラテンアメリカの軍隊と同様に、厳格な指揮系統のもとで動き、内部規約だけでなく命令と服従、そして規律を守らなければならなかった。そして、1982～83年の間イシル地域で遂行されたゲリラに対する軍事戦略の実施は、軍指揮系統によって戦略が練られ、その手段が伝達された結果である。1982年の軍事クーデターにより憲法が停止され、軍は大規模な反乱鎮圧戦略によってグアテマラの治安を安定させるという「安全保障と発展の国家計画」を承認した。軍のトップが知らなかったことはあり得ないし、最終責任は大統領であり軍の最高司令官であったリオス・モントにあることを明言した。そして「彼が命令していれば、すべての状況を一変することもできた」とも述べた。

混乱の中で判決に

原告側が140人もの証人を用意し、膨大な証拠文書やビデオなどを提出したのに比べて、被告側は公判中ほとんど反証しなかったのが印象的だった。被告側の証人、反対尋問も僅かであった。逆に抗告を100以上も出すなど、裁判を妨害・停止するために力を注いでいた。証人による証言がすべて終わった4月18日には、被告弁護士が裁判長の制止にもかかわらず退場し、これにより裁判が一時停止することとなった。さらに混乱を招いたのは、同日別の法廷で、ジェノサイド裁判の無効が言い渡されたこと

だ。この決定を下したのはカロール・パトリシア・フローレス判事で、4月3日に出た証拠の採用に関する憲法裁判所の決定以降に裁判を継続したのは違法などとして、裁判を2011年11月にまでさかのぼらなければならぬとの判決をくだしたのだ。が、これはその後ジェノサイド裁判を担当するハイリスクA法廷によって同法廷の司法権侵害として却下され、裁判は継続することになったという経緯もあった。

最終陳述でリオス・モントは起訴事実をすべて否定して無実を主張した。そして「特定の民族への攻撃を命令したことは決してなかった」と強調した。

判決

そして判決の日がやってきた。5月10日金曜日午後4時、裁判長ジャスミン・バリオスが判決文（要約）を朗読した。その要旨は、殺害された人びとについて法医学チームの証言と提出証拠による秘密墓地発掘の結果と被害者の証言が一致すること、山中に逃げた人たちが、飢えに耐え、中には餓死したり病死した人もいたという事実があったこと、女性らの意思に反する性暴力は、物理的、心理的な暴力であった。これらの証言はグアテマラ軍兵士による女性の強かんがあったことをはっきりと証明するものだということを確認した。また、イシルの人びとが、きわめて困難な状況でその文化的アイデンティティを守ったのは驚嘆に値する、としている。

また、ジェノサイドについても被害者証言と専門家証言が一致している。イシル民族が集団的殺害の目標とされたこと、虐殺、拷問、剥奪、集団的性暴力、強制排除、子どもたちを他の集団に移動するなどの行為が立証されたと認め、民族の人口の5.5%が殺害された。裁判官は軍がイシル民族を破壊する意思があったことを疑わず、そして軍上層部はこの出来事を支配しており、また市民であるマヤ・イシルの人びとに対する攻撃や拉致を止める権限も持っていた。リオス・モント被告は起こっていたことを知っており、そしてそれを阻止する権力をもっているがそうしなかったと結論。証人らの証言にあるように、村や集落が襲われ、家が焼き払われ、

人びとが殺されたが、事実上の国家元首であったリオス・モントがキチエ県で起こっていることを知らなかったというのは合理的ではない。証人らは、ヘリコプターや飛行機が爆撃にやってきたと述べたが、当時の軍大將はリオス・モントであり、軍事計画は軍諜報機関によって作成され、大統領により承認されていたからである。国家安全計画を作るように命令したのはリオス・モント将軍であり、ビクトリア82と名付けられる軍事キャンペーンの立案も命令した。命令しただけでなく、その内容も知っていたし、その実施も承認している。つまり、虐殺が行われていることを知っており、それを止めようとしなかった。よって刑法376条と378条のジェノサイドを命令した罪を適用しそれぞれ禁固50年、禁固30年を言い渡した。

最後に、真実を知ることは過去の傷をいやす助けとなるとし、法の適用は被害者の権利であり、法治国家としてのグアテマラの強化につながるとしている。また、このような犯罪は二度と繰り返されてはならず、グアテマラ国民は、自分たちのアイデンティティ、多文化・他言語の豊かさを認め、表現の自由を尊重することを望んでおり、平和があるためにはその前に正義がなければならない、と結論。検察に対しジェノサイドの調査をさらに進めるように命じた。

有罪が宣告された瞬間、超満員の法廷は大きなよめきと拍手が起こった。判決の朗読が終わるとテレビや新聞の取材陣が押し寄せ、場内は騒然となって、リオス・モントが弁護士らに囲まれて法廷を出ようとする動きがあり、裁判長が警官に連行されるまでは退場してはならない、と叫ぶ場面もあった。事態が落ち着き、リオス・モントが警官に連れられて刑務所行きに乗るまで30分以上もかかった。リオス・モントは「（この裁判は）国際的な政治的な茶番だ」と言い捨てた。

裁判の意義

元国家元首が自国の法廷でジェノサイドの罪を問われる、というのは世界でも初めてのことだった。そしてリオス・モントがジェノサイドの命令者として裁かれたことはきわめて画期的であった。

国際刑事裁判所の首席検事（2003年—12年）であり、アルゼンチン軍事政権を裁く裁判の検事（1985年）も務めたルイス・モレノ・オカンポは「この裁判は冷戦について、そして市民の殺戮が権力にとっての政治的道具であった時期について理解するのを助けてくれる……そしてアルゼンチンでもグアテマラでも、市民の殺害は単独のものでも軍による偶発的なものでもなく、計画と命令の遂行の結果であった。その意味で、命令者に的をしぼった裁判が非常に重要なのだ。」という言葉に寄せている。

裁判の傍聴には原告、被告それぞれの関係者のほか、人権活動家など大勢が毎日詰めかけ、国連高等人権弁務官や、国際法廷関係者、米国大使などの姿も見られた。スペインでジェノサイド裁判を始めている一人のリゴベルタ・メンチュウやミルナ・マック殺害事件で軍の責任をあばいたヘレン・マックなども来ていた。ヘレン・マックは、司法の場で初めて先住民の人びとが自分たちの主張を述べられたことと、被害者にとっての真実と正義が、平和な手段で達成できることが証明されたことの意義を語った。米国大使はグアテマラの法治にとって、真の和解と発展にむけて重要な判決であるというコメントをした。

リアクション

他方で、非常にネガティブな判決へのリアクションもあった。検察長官、判事、原告関係者への脅迫は続いているし、グアテマラ退役軍人会 (AVEMILGUA) や反テロリズム財団 (Fundacion Contra el Terrorismo) などが裁判の無効を主張し、ジェノサイドはなかったというデモや、裁判関係者への誹謗



- (上) 「グアテマラでジェノサイドはなかった」というカードを持つ女性。かぶっている帽子には「カイビル（悪名高い軍の特殊部隊）」とある。
(下) 反テロリズム財団による「ジェノサイドはなかった」キャンペーン。



中傷を繰り返した。特筆すべきは、経済界の反応だ。グアテマラの経団連ともいえるCACIFも同様に、判決に対するすさまじいネガティブ・キャンペーンを繰り返した。裁判では、グアテマラの経済支配層がどのように先住民族を搾取してきたか、そしてイシルの人びとをゲリラと決めつけることに大きな影響を与えたか、ということが明らかにされている。これらのリアクションは自分たちの利益に反するものは全て敵と見なし、暴力で解決しようとする内戦中と全く同じメンタリティと言えるだろう。

判決にあったように、今後さらにジェノサイドの責任者が追求されるならば困る人間が大勢出てくる。真っ先に責任を問われるのは現大統領ペレス・

モリーナだろう（ただし、大統領就任中は免責特権に守られる）。彼は元軍人で、リオス・モント時代にイシル地域の軍司令官で、虐殺の直接の指揮をとった人間だ。1982年の米国人ジャーナリストによるインタビューに答えて、「イシルのすべての家族はゲリラと一緒だ」と明言しているビデオは米国CNNスペイン語放送などで流された。

そして判決は無効とされた……

このジェノサイド裁判が始まって以来、被告側による控訴・抗告がこれまでに100以上も出された。裁判官への忌避申し立てもあり、グアテマラの司法制度はこれらに適切に対応することはおそらく不可能だろうと言われていた。すでに判定が出たものでも他の判定と矛盾する解釈があったりと、混乱が続いていた。そして、大統領、軍関係者や財界から判決を無効するように非常に強い圧力があつたとされている。5月20日の憲法裁判所判定はそんな中で出されたものだった。一審判決を無効とし、裁判を4月19日の時点からやり直す、というものだった。裁判の初日、リオス・モント側弁護士が倫理に反して裁判官2名の交代を要求し、退場させられたことに端を発して、その後「正当な手続きが行われなかった」と控訴していたもの。これが判決の前日5月9日に「手続きは正当であり、裁判官の怠慢は認められない」とする控訴裁判所の判決がおろっていた。だが、その判決を不当としてさらに憲法裁判所に提訴したもの。これが今回認められたことになる。憲法裁判所の判定は賛成多数（賛成3、反対2）で控訴が認められた。反対した判事の主な理由は、「違憲審査を行うという憲法裁判所の権限を逸脱する内容である」「退場させられた弁護士は、その後の手続きを経て弁護団に復帰していたので、既に解決済みだった」というものだった。

グアテマラは世界で最も治安の悪い国の一つであり、警察・司法が機能していない国でもある。犯罪の検挙率が5パーセント、警官の半分は腐敗していると言われている。憲法裁判所で判決が無効になったとはいえ、このような状況でこの裁判が行われたこと自体が驚異的だ。その背景には、今の検察長官クラウディア・パス・イ・パスが内戦中の人権侵害を裁くという強い政治的意志を持っていたことがまずあげられよう。彼女が2010年に就任してから、これまで内戦中の人権侵害事件の調査をいくつも指揮しており、ドスエレス事件など重要事件で直接の加害者に有罪判決がくだされている（注1）。そこから命令者を裁く道が拓かれていた。裁判官も、度重なる脅迫にも屈せず裁判を続けた。裁判長ジャスミン・バリオスは裁判の期間中防弾チョッキを着て裁判所と自宅を往復した。国際社会からグアテマラ政府に対し裁判を保証するように圧力もあった。だが、なによりも、イシルの人たちを始め、たくさんの人たちの不屈の努力がなければここまでこぎ着けることは不可能だっただろう。

やり直しとなったことで、裁判の行方がどうなるかは不透明なままだ。だが、2度目の判決がどうなるろうとも、元独裁者を被告席に座らせ、ジェノサイドとその責任を明らかにしたこの裁判の歴史的意義は失われないであろう。公判はインターネットやラジオ・テレビで公開され、多くの人々がその内容を聞くことができた。新聞などマスメディアもこの裁判を大きく取り上げ、社会全体でこの問題について議論が起きたことは重要であった。

注1 1982年ペテン県のドスエレス村で201人が虐殺された事件。その実行犯として軍の特殊部隊カイビルの隊員4人（当時）に2011年8月、有罪判決がくだされた。

<訂正>

前号のジェノサイド裁判紹介の中で「1171人が殺害され」とありましたが、「1771人が殺害され」の間違いでした。訂正いたします。

伝える力、伝わる力を生きる力に

—ニカラグア、グアテマラ 池田佳代



4月5～12日にニカラグアの北部大西洋自治地域 (RAAN) で、同18～19日にグアテマラの首都に近いミスコで、自らの考えや経験を数分の短編映像で表現するワークショップを実施しました。地球温暖化の影響、弱者やマイノリティーに対する風当たり、忘れがたい経験や人の営みなどを題材に30を超える作品が完成しました。

初めてでも完成できる方法論で映像制作

映像制作の方法は、前回2011年9月と同様に、デジタル・ストーリーテリング (DST) を用いました。進行と技術指導を行うファシリテーターに林綾美 (りん・るんみ) さんを加えて2人となり、参加者の倍増が実現しました。通訳はレコムの新川志保子さん、ニカラグア在住の田中紀子さんにご協力いただきました。参加したのは、ニカラグアのワspan市にあるワンキタグニ (ミスキート語で「川の花」) の呼びかけで集まった社会活動家や非営利組織のコミュニケーション担当者、ビルウィ市にあるCADPIの呼びかけで集まった青年組織のメンバーや組織に属していない若者、そしてグアテマラでは性暴力被害にあった少女たちの保護施設 La Alianza の職員たちです。

DSTは初めてでも映像を完成できる方法論です。今回は2日間の制作日数で実施しました。1日目



【上段】左から 自らソフトを操作し録音＝グアテマラ▽ラップトップを使い膝上で編集＝ワspan▽右から林綾美さん、新川さん、田中さん【下段】スクリーン前で作品を紹介＝ワspan▽ストーリーサークル＝グアテマラ



は、グループごとに輪になって各自の創作案を披露し合いながら構成を充実させていくストーリー・サークル、完成したストーリーを自分の声で録音する作業を、2日目はナレーションに組み合わせる画像を用意してパソコンで編集し、BGMを加えるなどして完成させ、上映会を実施しました。さらに、ワークショップの振り返り、今後の活動に活かす計画を議論する時間を、ニカラグアでは3日目に、グアテマラでは上映会の終了後に持ちました。

作品群は詳細な事実への道標

ニカラグアで完成した作品は、河川の汚染や水不足に由来する困難な状況をはじめ、森林の無差別な伐採や天然資源の管理への警鐘や勧告、暴力や差別、女性、若者、先住民などをテーマに、コミュ



ニケーション、多様性への理解、将来への希望やめざす将来像などが描かれました。この経験を生かすための議論の中で参加者たちは、その活動領域において、情報発信やコミュニケーションスキルの向上に役立てたいなど、具体的な希望や計画案を1人1人が述べていました。最後に、実施団体代表とファシリテーターらがサインした修了証が映像を完成させた各人に手渡されました。

ワスパンでは、話し合いの後で実際にココ川に出かけました。ホンジュラスとの国境に接しているココ川がハリケーン・ミッチ（1998年）で破壊された現場は驚くべき姿でした。今や崖となっている眼前の川は、土地がえぐられた結果だということです。人びとは農作業の度に崖を下り、船で川を渡るしかすべはありません。後で調べると、ココ川周辺では2000～3000の命が失われ、ホンジュラスではハンバーガー・コネクションの影響による牧草地化が被害拡大に影響したと指摘されていたことを知りました。航空写真でも地形の変化は確認できました。結果的に農地がとられていること、ハリケーンの巨大化や頻発化で樹木が育たないこと、気力が失われたままの農民の存在、国際援助が回復に役立っていない一面、などの伝聞が現実味を増す体験でした。

グアテマラでは、自分自身への問いかけに端を発したテーマが顕著で、自らの努力や希望が実現した経験のほか、権利の侵害や迫害が引き起こした現実を語る作品もありました。ソーシャルワーカーや教



(左)対岸となったミスキートの土地 (右)森林減少が進むRAANを上空から臨む (下)対岸を案内する農民

育に従事している参加者たちは、少女たちの回復段階にあわせて、技術の習得や表現力の開発、自らを見つめる機会として活用したいと考えているようでした。

各地のニーズに即してこの経験が活かされるよう、引き続き関与していきたいと考えています。

東京・ビルウィ同時上映会とネット対話

前回の実施で強く感じたのは、人びとの語る力が自らの想いだけでなく、作品群となることで社会像が映し出されるということでした。今回は映像をきっかけに、より詳細な事実に基づく道標を得られるのだと身をもって知りました。完成した作品は、ウェブサイトでも公開しますが、ニカラグアと東京で、時を同じくして開催する上映会では大きなクリーンでご覧いただくことができます。翌日は双方の会場をインターネットで結び、映像と音声で制作



者同士・会場同士が対話するイベントを今年も実施
します。ぜひ、お誘い合わせの上ご参加ください。

今回もレコムのみなさんには大変お世話になりました。また、この活動への関心や応援も増えてきました。より多くのみなさんの参加を楽しみにしています。

左上からワスパン（前列左が筆者）、ビル
ウィ、グアテマラの参加者たち。グアテマ
ラでは私たちに感謝状が贈られた。

交流するメディア2013 ニカラグアとの同時上映会&インターネット対話

とき 6月14日（金）19時～21時 同時上映会

6月15日（土）9:15～11:30 インターネット対話

ところ 大田区産業プラザPIO 6階C会議室

参加費800円、通訳あり

*会場では茶菓のほかニカラグアの音楽やコーヒーもご用意します

*同時上映会は今年制作した日本とニカラグアの短編映像約20作品を上映予定

*インターネット対話はニカラグアのビルウィと東京の二つの会場を結びます

問合せはNPO法人おおた市民活動推進機構・中野まで

(TEL03-5753-3860,FAX03-5753-3861, info@ota-suisin.org)

*デジタルストーリーテリングの手順や方法については、「そんりさ」2011年12月号
の筆者のレポートをご参照ください。

*完成作品は「交流するメディア2013 ニカラグア編」と検索してご覧いただけます。
「交流するメディア2011-2012 グアテマラ編」もあわせてご覧ください。

はじめての中米は衝撃の連続 林綾美(りん・るんみ)

2013年4月、デジタルストーリーテリングの企画で、はじめてニカラグアとグアテマラを訪問しました。はじめはたいへん心が躍っていましたが、現地で様々な現実に出会っていくたび、心は何度も折れそうになり、帰ってきた今も、ショックに打ちのめされ戸惑いの中にいます。そんな自分に衝撃を与えた中米での光景を、少し紹介したいと思います。



1. 半裸でかけめぐる子どもたち

ニカラグアのカリブ海側にあるホンジュラスとの国境の川「リオ・ココ」。その周辺の村を訪れた時、生まれて初めて半裸で野をかけまわる子どもに出会いました。栄養失調でおなかのぷくうっと膨れていて、手を口にあてて恥ずかしそうにしている女の子をみて、可愛いなあと思い、また、よくわからない複雑な気持ちになりました。

村の周辺に目をやると、問題になっていた森林伐採の話のとおり、本当に木が切られて若い木しかないことが分かりました。家々がボロボロで半壊していることや、ハリケーンでホンジュラスとの国境だった川が削れた事で農地が奪われさらに貧しくなった事など、厳しい現実をそのまま目にしたようにでした。

同じ地球に生まれた人間なのに、どうしてこうも育つ環境が違うのだろうか…世界的な貧富の差の現実を、加害者(先進国)側として、叩き付けられているような思いがしました。

2. 土曜学校の子どもたち

レコムの支援で、グアテマラ現地のNGOグアダルーペにより開講されている土曜学校を訪問したと

きもまた、元気いっぱいの子どもたちが授業を受ける光景に圧倒されました。やっぱり中米の子どもたちってめちゃくちゃ可愛いな、とトキメいてしまう気持ちと同時に、目にとまる栄養失調そうな子のむくんだ顔、痩けた頬。印象深く目に焼き付いて今も離れません。

農村の村ポアキルで、貧しくて平日の昼間に学校へ行けない子どもや、学校へ行けてもスペイン語が話せずついていけない子どものために、一年前から先住民の言葉で開かれたこの土曜学校では、栄養バランスのとれた昼食も出していました。そこへ来ていた一人の5歳の女の子が、別の日に市場の露店で店番をしていました。彼女の姉は、見るからに小さくて12歳くらいに見えるものの実際は15歳。8歳くらいにしか見えない兄は13歳だそうです。栄養が足りてないのか、身体がとても小さかったです。土曜学校に通う5歳の彼女はまだ身体は普通の大きさで、このまま日本からの支援が続き、せめて週一回のバランスのとれた食事で、すくすく育ってほしいと思いました。



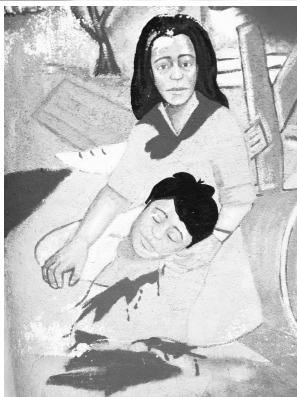
3. 性暴力を受けた少女たちの居場所

性暴力を受け、なんらかの形で通報され保護された少女たちの居場所、「アリアンサ」(グアテマラ)には、親によって個人へ売り飛ばされ保護された子や、親族による性暴力を受け続けた子などが生活している場所。私たちはその指導員たちに向け、映像のワークショップをしました。

ある日、少女たちが指導員に群がるのに紛れて、赤ん坊が2人、抱かれていました。小さくて少しか



弱くて、生まれたばかりのようでした。その少し向こうで、赤ん坊と手をつなぎ歩く少女がいました。小学生にしか見えない少女が、面倒見よく赤ん坊を歩かせていました。12歳や13歳で強かんされ妊娠し、親子で施設入りす



るケースもあるらしく、見た感じでは10歳ぐらいにしか見えない小さな少女もいました。

想像を絶する経験をしてきた彼女たちの姿を、自分は映像の「講師」と名乗って、何を偉そうに見つめていられるだろうか…ハグして挨拶してくれる少女たちに、いったいどう接したらいいのか…じっと見つめてくる、大人のようなまなざしが忘れられず、その後数日間、頭の中がいっぱいでした。

4. コマラパ青年組織のアミーゴたち

昨年6月に東京で開かれた、「日本×グアテマラ DST作品上映会&インターネット対話」で、私は実際にサン・ファン・コマラパ村の青年たちとスカイプで対話をしました。生きる環境が違って、その環境にいる人たちのつくった映像作品をみて対話をする事で、映像の中の生活がかなり身近に感じられる事がとても印象深く残り、実際に会ってみたい！と思っていました。そしてついに今年、彼らについて会うことができました。

インターネット対話の中で、「ドキュメンタリー作品をつくりたいが、機材がない」と話していたため、日本の友人たちにメールで呼びかけ、集まった

2台のビデオカメラと付属品を持参し、彼らへ寄贈しました。私たちの行った映像制作レクチャーとともに、とても喜んでもらう事ができ、制作したい作品の内容をキラキラした目で話す姿をみて、一緒に応援したい気持ちでいっぱいになりました。

また、衝撃的だったのは、彼らの描いた壁画が村のそこらじゅうにあったという事。マヤの文化、内戦の歴史など、これまで知識のほとんどなかった事実が、とてもストレートに心に入ってきました。



私はスペイン語をほとんど話せませんでした、同じ20代である事だけでなく、映像やアートを愛するクリエイターという共通項で心の距離がとても縮まり、言語を超えて通じ合えたように感じました。その後もfacebookでつながり、作品の経過や交流をこれからも続けていける事が、なにより嬉しい思い出となりました。そして大切なアミーゴたちの抱える問題、歴史、社会のことを、もっともっと知りたいと思っています。

はじめての中米訪問。今思い出しても、水道の水が止まっていたことや慣れない食事による腹痛など、生活面でも辛いことが多かったのですが、訪れる場所全てが、ここには書ききれないほどたくさんのショックの連続でした。これをきっかけにもっと中米について知り、現在の状況を少しでも改善できるアクションに繋げていけたらと思いました。

日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (CLIJAL)の活動から バリオの子どもたちと、ラテンアメリカ の児童書翻訳

宇野和美 (スペイン語翻訳者)

これまで4回にわたってCLIJALの活動を紹介してきましたが、今回はバリオの子どもが主人公の児童書を紹介し、ラテンアメリカを描いた子どもの本の翻訳出版について考えてみたいと思います。

バリオとは、地方から移ってきた人びとが、街をとりまく山の斜面などに粗末な小屋を建ててできあがった低所得者居住地区のこと。ビジャ（・ヌエバ）、ポブラシオン、ファベラなどとも呼ばれるこうした地区は、ラテンアメリカの多くの町に見られます。ごく最近日本語版が刊行された絵本『道はみんなのもの』（クルーサ文／モニカ・ドペルト絵／岡野富茂子・岡野恭介訳／さ・え・ら書房）は、ベネズエラ的首都カラカスのバリオが舞台です。遊び場のないカラカスのバリオの子どもたちが立ち上がり、市役所に行って交渉し、力を合わせて公園を作りあげる物語です。



石で押さえたトタン板の屋根や、ドアがわりに布がぶらさげている玄関、赤ん坊を抱いた女性、はたらく洗濯物など、こまごまと描きこまれた写実的な絵からバリオの暮らしぶりが伝わってきます。中南米の絵本出版の草分けであるエカレ社が、海外の絵本だけでなく、自分たちのことを語る絵本もという

コンセプトでつくりはじめたシリーズAsí vivimosの1冊で、30年以上もベネズエラで読みつがれてきた、実話にもとづくロングセラーです。

小学校高学年向けの物語『雨あがりのメデジン』

（アルフレッド・ゴメス＝セルダ作／宇野和美訳／鈴木出版）の主人公カミーロは、コロンビア第二の都市メデジンのバリオに住む10歳の男の子です。学校に行かなくなり、将来は泥棒になると豪語して、親友のアンドレスと町をほっつき歩いているカミーロは、ある日バリオに新しくできた図書館に足を踏みいれます。はじめは図書館から本を盗みだして売ることしか頭にないカミーロが、図書館員のマールさんの介在で本と出会うというお話。10歳になったのだから、金は自分でなんとかして酒を持って帰れと言うのんだくれの父親、武力抗争で殺されてしまったおじさんなど、現実には厳しいものです。しかし、アンドレスとの友情がしっかり描かれているおかげで、日本の読者が主人公に親近感を持てるのも、この作品の魅力です。

メデジンでは麻薬を手にする子どもが多く、中学生くらいで歯がぼろぼろの子も大勢いるとは、住んだことのある人の話です。2010年にメデジンの読書計画協力会議という団体がIBBY朝日国際図書普及賞を受賞しましたが、その代表エルナンデスさんは、自分は本があったから麻薬に手をつけずにすん



だと語り、子どもに本を届ける活動を続けています。前回の心配ひきうけ人形のときにご紹介した、チリのLectura Vivaという団体のマリアへさんが、「チリの子どもたちが貧困や暴力の連鎖に陥らずに生きていくために本が必要」と悲痛なほどに訴えていた姿が重なって、ラテンアメリカにおける読書の意味や、本や物語の力についても考えさせられます。



『アンデスの少女ミア』（長田弘訳／BL出版）の主人公のミアが住むのは、チリのサンティアゴ郊外にある貧しい人びとの居住区です。トタン板を寄せ集めた掘っ立て小屋に住み、ゴミ捨て場で拾い集めた段ボールなど不用品を売って生計を立てています。ミアのペットである、ひろってきた犬のポコをめぐるストーリーに、著者の英国の絵本作家マイケル・フォアマンは、サンティアゴに旅行した際に出会ったさまざまな人びとのスケッチを挿入しています。

こうして見ると、多くの貧困層をかかえたラテンアメリカの姿がうかびあがってきます。作品には社会が反映するものなので、ラテンアメリカの児童文学は、物があふれる欧米のそれとは、興味もテーマも描き方もおのずと違ってくるのでしょうか。たとえば、エンターテインメント色の強いファンタジーや、高校を舞台にしたリアリスティックフィクションのオリジナル作品は、数自体が欧米よりうんと限られているという印象があります。

先日、エルサルバドル出身の20代後半の女性に話を聞く機会があったのですが、彼女が子どもの頃

は、週に3日ほど計画停電があったので、停電の夜はよく友だちの家などに集まっておばあさんの話を聞いたのだそうです。彼女は不便さを感じるよりも、停電の日が楽しみだったとか。同世代の日本人とはまったく違うこういう環境から、どのような作品が生まれるのでしょうか。

私は20年ほど子どもの本の翻訳をしています。ラテンアメリカの児童書の翻訳出版はたやすくありません。大量に売れるものを求める傾向が強まる中、英米の本のほうが売れるのも事実で、ラテンアメリカの作品は肩身が狭くなる一方です。海外からとり入れるものに求められるのは、まずは日本人の嗜好にあったおもしろさのようです。

また、貧困や暴力などが描かれていると、日本の読者がその国に対してネガティブな印象ばかりを持ってしまうのではと、紹介にためらいが生じることも。しかし、難民の現実を下敷きにした絵本『エロイーサと虫たち』（ハイロ・ブイトラゴ文／ラファエル・ジョクテング、さ・え・ら書房）の編集者は、コロンビアのバリオを描いた別のYA小説について私が「悲惨すぎて日本で出すのは難しい」とコメントしたところ、「でも、これが私たちの現実なの」と言いました。自分たちの現実を知ってもらいたいという強い思いがあるのでしょうか。ではどう伝えるかは、翻訳者に投げかけられた問いです。

児童書翻訳という楽しげに聞こえそうですが、そんなわけで、日々悩み、試行錯誤しています。口当たりのよい楽しい部分だけではない、世界のありのままの現実や価値観の違う他者の存在を子どもたちにきちんと伝えられるメディアは案外少なく、翻訳児童文学の存在意義の1つがそこにあると信じています。たとえば今は、児童文学のノーベル賞とも言われる国際アンデルセン賞を昨年受賞したアルゼンチンの作家、マリア・テレサ・アンドルエットが描くビジャ・ヌエバを舞台にした作品を紹介できないかと考えているところです。作品を通して遠い世界の人びとを知ることが、想像力の土台になると思うのです。

第66景 モンテビデオにて

奇怪なサルボの塔が懐かしかった。記憶に間違いがなければ24年ぶりに訪れたモンテビデオの街並は、あまり変わっていなかった。40数年前に初めて歩いたこの都で、私の眼に真っ先に飛び込んできたのが、独立広場と7月18日大通りの角にそびえる27階建てのパラシオ・サルボだった。アールデコの作風で、1928年に実業家サルボ兄弟が建てたこのパラシオは高さが95メートルもあって、南米で当時2番目に高い建物だったという。独立広場は変化していた。周辺が整理され、広場は大きく立派になっていた。馬上の英雄ホセ・アルティーガス（1764～1850）の銅像は普通のだが、広場の一角を大統領府の現代的な建物が占めている。だがサルボの塔は同じだった。しかし、街の雰囲気は何か違っているように感じられた。

私がラ米通信員・特派員時代にウルグアイに通ったのは、政情と人道犯罪の取材が目的だった。唯一の例外は、1986年9月ブンタデルエステでの厄介で味気ないウルグアイラウンド交渉の取材だった。70年代初め、この国では都市ゲリラ「トゥパマロス—民族解放運動（MLN）」が暗躍していた。ゲリラと警官が白昼、プラタナスの街路樹を盾に銃撃戦を展開していた。その場に軍隊が到着するころ、ゲリラは姿を消していた。軍政が民政に戻った80年代後半は、軍政が犯した人道犯罪に光が当てられた。私は、今日の政権党「拡大戦線（FA）」の創設者リベル・セレーニ退役将軍や、元トゥパマロス幹部にインタビューした。彼らは皆、獄中で死の恐怖にさらされた経験の持ち主で、歴史の生き証人である。彼らの証言を伝える仕事は、ジャーナリストの最も神聖な職務に含まれる。

今年1月の訪問時に首都の趣が違うように感じられたのは、アフリカ系市民に対する差別問題が取材目的だったからだろう。去年の12月、モンテビデオで若い黒人女性が、白人女性4人から差別言葉を罵られ、殴

打され足蹴にされた。世論は直ちに反応し、超党派の5000人がデモ行進し、事件と人種差別を糾弾した。私は東京に居て、この事件に関心を持った。久々のモンテビデオでの取材の的は最初からしぼられていた。

タニア・ラミーレスという名の暴行事件の被害者は、「少女のころ、アフリカ系として差別問題に目覚めたが、社会に反逆するのは思い留まれという親たちからの戒めを敢えて破ろうとはしなかった」と語っていた。島崎藤村の『破戒』を思わせる述懐である。だが人種差別の場合、差別される側の人種は風貌から明白だ。だから「破戒」は、差別を糾弾する意思を爆発させることである。12月の事件は、多くのアフリカ系の若者を「破戒」に至らしめた。

学ぶことの多いホルナーダ（取材の一日）だった。その夜、市内のアフリカ系の多く住むバリオでは、カルナバルの走りとなる「シャマーダ（LLAMADA）」が展開された。踊りと太鼓の文化カンドンベが集団（コンパルサ）となって行進する。それがシャマーダだ。あるコンパルサの拠点は倉庫だった。男と女が準備でござった返す倉庫の壁には、チェ・ゲバラの肖像が掲げられていた。チェは、ここにも居た。

ブエノスアイレスの厚さ5センチものビフェ（ビーフステーキ）とは異なるモンテビデオの、やや薄いのが大型のビフェを食べ、夜遅くモンテビデオを後にした。

【月刊「LATINA」2013年5月号掲載の記事「人種差別と闘うアフリカ系ウルグアイ人」参照】

豚肉とナスとキノコの炒め煮

Carne de Cerdo con Berenjenas y Setas

日本のどこでも手に入る豚肉とナス、キノコ、タマネギを使った、簡単でおいしい料理を紹介します。

ナスは2000年以上前からインドやアラブ諸国で栽培され、地中海沿岸に広がり、中世になってイスラム教徒がスペインにもたらしました。アメリカ大陸にはスペイン人が16世紀にもちこんでいます。

栽培が簡単で、さまざまな料理に使用でき、薬としても有用だったため、メキシコでは先住民も含めて広く受け入れられました。ナウアトル語では Camohtomatl といいます。

ユカタンのマヤの人々も、日々さまざまなナス料理を食べています。以前紹介したナスのクリームスープもユカタンではしばしば食卓にのぼりません。

ナスの学名は *Solanum Melongena* といい、ジャガイモやピーマン、トマト、タバコとともにナス科に属しています。暑さに強く摂氏45度まで耐えられる一方、10度以下の寒さには耐えられません。



ビタミンE、C、B1、B2、葉酸のほか、カリウムやリン、カルシウム、鉄などのミネラルも含み、脂質はわずかで、皮ごと食べれば繊維質もあり、きわめて低カロリーです。

ビタミンEのおかげで、がん細胞の成長を抑える作用もあります。コレステロールを減らす成分や、抗酸化作用のある成分も含んでいます。

■材料 4人分

- ・豚の薄切り肉 400g
- ・エノキ 小パック 1
- ・タマネギ中 1/2
- ・ナス中 2個
- ・ビール 1/2カップ
- ・トマト中 1個
- ・オリーブオイル 大さじ2杯
- ・ウスターソース 大さじ4杯

■作り方

- 1) ナスを薄めの輪切りにして約10分間ゆでる。冷ましたあと軽くしぼって水気を切る。
- 2) エノキを洗ってゆで、冷ましたあと水を切る。
- 3) タマネギを細く切る。
- 4) トマトを洗って細かく刻む。
- 5) フライパンでオリーブ油をあたため、豚肉とエノキ、ナス、タマネギ、刻んだトマトをよく炒める。ビールとウスターソースを加えたあと、蓋をして、水分が抜けて、ソースがペースト状になるまで弱火にかける。
- 6) 米飯やフランスパンといっしょにどうぞ。

コロンビア 世界最多の国内難民

国内難民監視センター（IDMC本部ジュネーブ）によれば、コロンビアの国内難民は490万人から550万人にのぼる。この50年間で国民の10人に1人が暴力的に住む場所を強制退去させられたことになる。この人たちが都市部に流れ込みスラムを作っている。ボゴタの南部の丘にはたくさんのスラムがある。政府とゲリラの間で和平交渉が行われているが、戦闘は停止していないために難民の数は増え続け、2012年には23万人が新たな国内難民として登録された。政府は犠牲者の救済と土地返還に取り組んでいるが、武力による暴力が蔓延しているためはかどっていない。難民救済は、難民法ができて1996年からの難民登録が可能となり、新たな法律によって85年までさかのぼって難民登録が可能になった。現在までの登録は490万人にのぼる。けれどもこの数字は別の場所へ定住した人や元の場所へ戻った人は含まれていない。また右派組織の犯罪グループによって強制退去させられた難民も含まれていない。このような人たちを含めれば550万人にのぼると見られている。国連難民高等弁務官事務所は、国内難民が増えていることに懸念を示している。和平協定が実現するまで国内難民の数は増え続けるだろう。(BBCMUNDO2013/4/29)

コロンビア 和平プロセス、土地問題に関する協定締結

政府とゲリラ組織FARCの間で和平交渉が続いているコロンビアで、このたび「土地の所有と使用についての協定」が締結された。公正かつ民主的な方法で土地問題を抜本的に改革する始まりとなるかどうか注目される。政府とゲリラの共同声明によると、協定は小規模農家を重視し、土地の分配、貧困との闘い、農牧畜の推進、農村部の経済活性化を中心課題とし、土地を持たない人びとに土地を与え、住宅建設と水道建設、技術支援、教育、土地の有効利用、インフラ整備などを行う、としている。また同協定には、強制移住させられた人など軍事紛争の被害者の補償もうたわれている。だが、和平交渉で最初に言われているように「すべてに合意できなければ何も合意されていない」ので、あくまでも第一歩にすぎない。また、サントス大統領が言ったように、全協定が締結された時点で、その内容について国民の承認を得なければならない。次に交渉されるテーマはゲリラの社会復帰・政治参加についてだが、国民の多くはゲリラが犯した犯罪の責任を取るべきだと考えているが、FARCは自分たちは加害者でも被害者でもないという立場を変えておらず、合意に難航が予想される。政府側が年内に交渉を終えたい意向なのに比べて、ゲリラ側は現実的ではないと反発。2014年には次の大統領選挙があり、和平プロセスは時間との闘いでもある。(BBCMUNDO2013/5/26)

メキシコ ジャーナリストの殺害つづく

ジャーナリスへの殺人や行方不明に対する抗議デモが、メキシコの11都市で同時にあった。ベラクルスでプロセソ誌のレヒナ・マルティネス記者が殺害された1周年にあわせたもの。全国人権委員会は2000年以来81人のジャーナリストが殺害されたと報告している。4月23日にはコアウイラの報道カメラマンが殺された。カルデロン元大統領が対麻薬密輸戦争を布告したことで、特に麻薬カルテルが統制している地域でジャーナリストへの暴力がエスカレートしている。2013年には3人のジャーナリストが殺され1人が行方不明になっている。プロセソ誌記者がマルティネス記者の殺害について調べ、ベラクルス州政府による調査を批判する記事を書いたところ、死の脅迫を受けた。4月初めにプロセソ誌が州政府の役人たちが脅迫に関与していると告発したが、州政府は否定している。同時期にいくつかのマスメディアが襲撃されたが、誰によるものかは不明。このような中で「立ち上がるジャーナリスト・ネットワーク」ができ、24のマスコミや人権組織が参加した。今回のデモは2回目で、主催者はジャーナリストが安全に仕事ができるよう国家が保障することを望むと述べた。(BBCMUNDO2013/4/29より)

グアテマラで軍政下の1982～83年、マヤの人々を虐殺し、ジェノサイドなどの罪に問われた当時の大統領、エフライン・リオス・モント元将軍に有罪判決が下されました。民政移管後はもちろん内戦終結後も軍が強い力を保ち、司法は一般犯罪にすら脆弱な国で、30年を要しながらも被害遺族たちは正義を追求しました▼被害者たちと同様に弾圧を受け、ジャングルに逃れた国内避難民たちが形成していた「抵抗の共同体」を私が訪ねたのは93年末。まだ軍の迫害が残る過酷な状況を生き抜いてきた人々と交流し、「分かち合う強さ」を学びました。レコムが発足したのも同じ頃です▼それから約20年。日本で日常を送る私も、レコムを通じてマヤの人々とつながってこられました。最後に現地を訪れたのは10年余り前ですが、人々の表情は今も鮮やかに目に浮かびます。これからもレコムの会員を続けていきます。(太田裕之)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、
 発送は京都で 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| Vol.142 サパティスタの新しいサイクル | Vol.138 パナマ先住民族ンガベ・ブグレ |
| Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪 | Vol.137 グアテマラ視察報告 |
| Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力 | Vol.136 ボリビア先住民族政治と道路建設 |
| Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性 | Vol.135 あるコロンビア難民の死 |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>
 84万9872円

<グアテマラ基金>
 70万6152円
 (2013年5月現在)